

平成26年度「出雲文化活用プロジェクト」事業報告

公益財団法人手銭記念館学芸員 佐々木 杏 里

1. 手銭家と手銭記念館

手銭家は、貞享3年（1686）、出雲市と大社町のちょうど中間あたりに位置する出雲市白枝町しろえだから大社へ移り住み、『白枝屋』という屋号で酒造業などを営んだ商家である。現当主は十一代で、初代から同じ場所に住まいしている。

後代になると木材、木綿、薬、藩御用など折々にいくつかの商売も並行して行っているが、江戸の終わりまで酒造業を続ける傍ら、杵築六ヶ村の大年寄、御用宿¹⁾を勤めていた。また出雲大社との関係も深く、江戸時代には御神酒を納め、代々千家家近習格、祢宜格などの処遇を受けていたほか、千家国造家の台所勘定方も勤めていた。

公益財団法人手銭記念館は、手銭家から寄贈された美術資料約470点をもとに、平成5年4月に開館した私立の美術館で、江戸時代を中心に鎌倉時代から昭和中期までの、書画、陶磁器、漆器、木工、金工、刀剣刀装具類など日本美術全般に亘る館藏品と、手銭家所蔵の美術資料や生活用具、古文書類を利用した、年4～5回の企画展示と、江戸時代後期から昭和初期までに作られた出雲の工芸を展示する常設展示を行っている。

手銭家には美術資料の他に

- 手銭家当主が代々記した公私の記録である「萬日記」と付随する手紙、手控え等
- 手銭家が勤めていた大年寄という町役に関わる「御用留」と付随する記録類
- 江戸時代の文芸享受および創作活動を示す



写真1 手銭記念館

詠草、短冊、刊写本、一枚摺等の文芸資料など膨大な文書資料が残されている。

刊写本ならびに文芸関係資料については、島根大学法文学部山陰研究センターと共に平成17年から継続して調査を行っており、近世資料に限るとこれまでに約650点—1,000冊余一の蔵書と約1,000枚の文芸関係資料（短冊、一枚摺等）を確認し、順次、島根大学附属図書館のデジタルアーカイブ上で公開してきた。

また、「萬日記」等は、記念館での江戸期の大社を振り返る企画展示でところどころ取り上げている。

2. 「出雲文化活用プロジェクト」について

これまでの調査と展示から、これらの資料が江戸期の大社における文化の豊かさと独自性を伝える、貴重な資料群であることが改めて明らかになってきた。しかしながら、資料の膨大さと資金、人員の少なさなどの理由からなかなか調査は進まず、ほとんどが未整理のままであり、得られた成果も十分に公開、活用するに至っていないのが現状である。

そこで、調査研究と資料の活用をより一層すすめるために、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館、手銭記念館が連携して『出雲文化活用プロジェクト』を発足させた。

「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受けたこのプロジェクトは、

- 大学との連携によって、江戸時代の歴史的、社会的、文化的な研究において大きな意味を持つと考えられる所蔵資料の調査研究をより広く深いものとし、研究成果の発信機能を強化することを図りつつ、これまで埋もれていた地域の歴史や文化を明らかにすること
- 江戸時代の大社における生活文化や文芸活動などの様相を広く地域市民と共有すると共に、町おこしや振興への新たな材料や付加価値を提供すること
- 新たな歴史や文化の掘り起こしと地域への成果の還元を起点として、各施設、家庭などに眠る歴史的に価値ある資料のさらなる発見が促進され、地域の歴史、文化発掘のサイクルを生み出すこと

を目的としている。

平成26年度の事業では、手銭家資料のうち

- 江戸期の文芸活動において前半の隆盛期に当たる三代当主から五代当主が残した「萬日記」
- 俳諧や和歌を中心とした文書資料
- 茶の湯、華道など当時の生活文化が分かる資料

の三点を中心に調査研究を行い、その成果を、企画展示、公開講座・シンポジウム、ワークショップ、デジタルアーカイブ上での公開といった形で一般に公開、発信することと、約100年にわたって当主が御用宿や冠婚葬祭といった公私の行事などさまざまな記録を記した「萬日記」（全15冊・約5,712丁）を全ページデジタル化し、最終的には全翻刻することを目標に翻刻下読みを開始することを目標とした。翻刻については、資料研究、解読の技量と知識の向上にも役立つのではないかということから、島根大学の学生に積極的に参加して貰うこととした。

3. 平成26年度の活動

3.1 資料のデジタル化と公開

今年度は「萬日記」全冊及び、企画展「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～」展示資料を中心とした文芸関係資料、合わせて902点の資料を撮影し、デジタルデータ化した。これらの資料のうち、公開可能なものについては、島根大学附属図書館デジタルアーカイブ上で順次公開していく予定である。

3.2 「萬日記」翻刻

「萬日記」は、手銭家当主らが代々書き継いだ記録で、内容は、御触書、藩への書状など公的な書類の写しから、家業に関わる諸事、冠婚葬祭などの私的行事、様々な噂話まで多岐に亘り、現在のところ、宝暦2年6月から明治9年までに書かれた「永代萬日記」、「萬日記 二番」～「萬日記 十一巻」が確認されている。このうち「永代萬日記」は明和期から天明期までの内容の抜き書きであるように思われる。

プロジェクトでは、全翻刻に向けて「萬日記 二番」から年代を追って順

番に下読み作業を開始することとし、小林准士島根大学法文学部教授を中心に、まずは「萬日記 二番」の下読みを、ゼミ生、院生、卒業生など10名にお願いした。

しかし、さまざまな事柄が脈絡なく書かれているため頻繁に初出の言葉があることや、当主一人ではなく幾人か

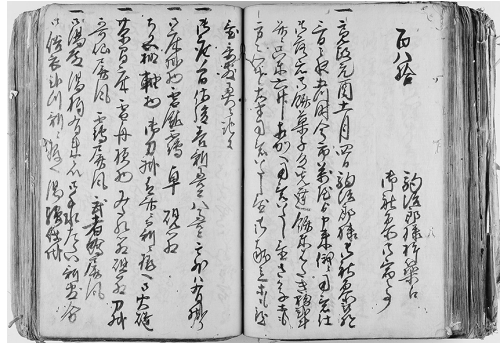


写真2 萬日記

によって書かれたようで文字の崩しが違うことなど、事前の予想よりもずっと難読箇所のおおい資料であることが次第に明らかになり、結果的には予定の半分程度しか下読みが進まなかった。

3.3 企画展「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～」

企画展では、大社における江戸時代の文芸活動の様相や変遷を和歌と俳諧を中心に辿ることで、大社における文芸活動の豊かさや、手銭家資料がそれらを具体的に示す貴重な資料群であることを広く知ってもらい、郷土の歴史と文化への理解を深めてもらうことを目的とした。

この企画展の準備を進める中で、和歌と俳諧両方の分野で未出資料が複数見つかかり、8月に行ったメンバーによる研究会において、和歌においても俳諧においても大社では他所とは異なった独自性を持った活動が行われていたことがより明らかになったため、これらの新出資料も展示に加えた。

関連企画として、公開講座・シンポジウム・ワークショップ等も行った。

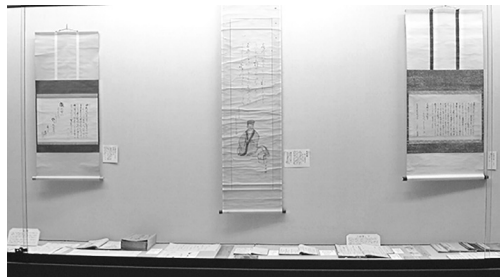


写真3 企画展

3.3.1 関連企画 (1) 連続講座

蔵書調査に加わっていただいている研究者の方達を講師に迎え、前半はこれまでの調査で分かった大社における文芸活動についての講演、後半は展示室でのギャラリートークを行った。



写真4 連続講座1

第一回 「手銭家歴代の和歌活動

—歌壇史上の意義を中心に— 久保田 啓一先生 (広島大学教授)

手銭家三代・季硯、四代・敬慶、五代・有秀の時代、小豆沢常悦の指導を受けていたことが、添削や批評の手紙を添付した詠草資料や百人一首に関する講義を筆記した記録等の所蔵資料から、具体的に分かってきた。手銭家所蔵資料から、大社における江戸時代中期の和歌活動についてひもとく。

第二回 「江戸時代末期の大社歌壇」 芦田 耕一先生 (島根大学名誉教授)

江戸時代後期、大社歌壇では和歌活動が隆盛を迎え、「^{まとい}円居」と呼ばれる会が頻繁に行われるとともに、おおくの和歌関係書籍も出版された。その中心は本居宣長に学んだ千家俊信を師とする、千家尊孫、島重老、千家尊澄、富永芳久らであり、手銭家七代の妻・さの子も積極的に参加していた。江戸末期に花開いた豊かな文芸活動を見ていく。

第三回 「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」伊藤 善隆先生 (湘北短期大学准教授)

落柿舎系俳諧を伝えた廣瀬百蘿を中心とした、江戸時代中期の大社俳壇と手銭家各代の活動、また、百蘿以前の大社の俳諧の様相を伝える資料を紹介し、大社俳壇の特徴と俳諧史における意義を考える。

3.3.2 関連企画 (2) ワークショップ

【料理再現～秋の茶懐石～】

手銭家が所蔵する「大圓菴様御一代御茶事記」と題された茶会記に記された懐石料理を調理、試食するワークショップ。「弘化二年筆写」(筆者不明)とある。この茶会記は雲州松平家七代藩主治郷(不昧)が隠居の後、江戸大崎別邸で文化3年(1806)12月3日から文化14年(1817)の間に行った茶会のうち56回分について、用いられた道具類や出された料理を記録したもので

ある。今回は、調理体験希望の12名が、出雲市内で和食店を営む安藤登さんの指導を受けながら調理を行い、手銭家に伝わる江戸時代中期の朱塗り椀、明治初期の輪島塗菓子椀などに盛りつけ、試食希望者20名と共に試食した。

【献立】

飯 鯛飯 割き松茸
 向付 鯛作り、キクラゲ、干生姜（いり酒で）
 汁 モヤシ、とうがらし
 椀 冬瓜葛煮、柚子
 引物 鮑やわかか煮、里芋
 香物 奈良漬

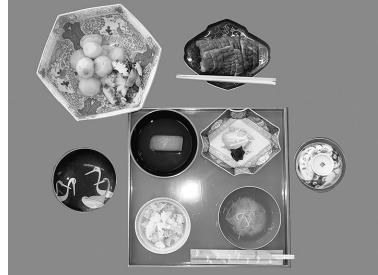


写真5 懐石料理

現代の私達には普通の献立のように見えるこれらの料理だが、当時としては珍

しい食材、高価な食材、日付から考えると出始めの食材が使われており、「江戸の贅沢」を考慮することのできる体験となった。また、今回盛りつけた食器の木の薄さやしっかりした塗りに驚いた参加者がおおく、江戸から明治にかけての木工・漆工技術の高さも体感して貰えたのではないかな。

このワークショップについては、料理と食器の両方が良かった、続けて欲しい、参加したいという感想がおおかった。

「大社・能を知る集い～奈良絵本を読む～」

講師 安田 登さん（能楽師 下掛宝生流ワキ方）／

梶宅 聡さん（能楽師 森田流笛方）／

奥津 健太郎さん（能楽師 和泉流狂言方）

手銭記念館では、これまでも国引き神話、歌枕、道行き、祝言など、出雲とも関係する素材を用いながら、能や狂言を体験するワークショップを行ってきたが、今回は企画展でも展示している奈良絵本『熊野の本地』（手銭家本）をテキストに、能楽の唱法や節回しを当てながら音読した。

江戸前期のものと思われる「手銭家本」は、多様な散らし書きで書かれた詞書が特長だが、話の展開が早くドラマチックであること、主に感情表現に関わる部分が散らし書きで表されているためか、音読すると一字一字追うことになり、それが読み手に内容を意識させる上でも効果的であること、能楽

の拍子や抑揚にも乗りやすく謡いやすいこと、などが実際に音読することで分かった。また、全体に言葉が平易であることから、語りのテキストとして編集されたことが推察され、資料の成立などについて今後、調査研究を進めることが必要だと分かった点でも、意義深いワークショップとなった。

「能と狂言を体験しよう」—小学校でのワークショップ—

大社小学校、遥堪小学校の六年生を対象に、能楽師の声や所作、音を身体で感じて貰うことと、能と狂言の歴史、特長、表現などを学びながら体験してもらうことを目的として学校へ出向いて行うワークショップ。大社は神楽の上演がおおく社中もいくつもあるので、神楽を演じた経験のある子供はおおいが、このワークショップから、神楽と能楽の関係、違いや共通点などについて考え、郷土の芸能に対して新たな視点や興味を持つことも期待した。

生徒達からは、強い印象が残ったことがうかがわれる感想がおおく寄せられた。

3.3.3 関連企画 (3) シンポジウム

「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～」

田中則雄島根大学法文学部教授による基調講演では、これまでの調査と今回の展示及び連続講座を基に、手銭家蔵書の特徴、大社における江戸時代の文芸活動の変遷とそれらを担ってきた人々、手銭家各代がどのように文芸活動に関わってきたのか、大社における文芸活動の特色等が述べられた。

後半のパネルディスカッションでは、田中先生が司会を務め、連続講座で講師を務めていただいた芦田耕一先生（島根大学法文学部名誉教授）、久保田啓一先生（広島大学文学部教授）、伊藤善隆先生（湘北短期大学准教授）



写真6 シンポジウム

に佐々木杏里（手銭記念館学芸員）が加わり、手銭家の人々と各時代の文芸活動指導者の関係、時代毎の傾向や特徴について解説を加えながら、資料から見えてきた時代ごとの文芸活動について討論を行い、手銭家蔵書と大社における文芸活動の意義、プロジェクトとしてこれからの

方針などについて話し合った。

手銭家三代～五代（18世紀後半～19世紀前半）時代の資料からは、和歌が公家の文化から地方の有力町人と広がっていく様相や、大社の俳人達が周囲を席卷していた美濃派と呼ばれる俳風とは一線を画し、落柿舎系の俳風をしなやかに保った様子が分かるのだが、幕末にいたる手銭家六代～七代の時代には、和歌と俳諧の添削が点印を用いて同じ詠草綴りの中で行われるという他所では見られないような資料があり、和歌と俳諧が優劣なく行われていたと思われること、^{まとい}円居と呼ばれる文芸サロンで、身分を越えて和歌、物語などを楽しんでいたことなど、大社という土地の特異性と独自性を強く考えさせられる資料がおおい。

いずれにしても、江戸時代中～後期の大社の文芸活動がこれまで考えられていたよりもずっと質量共に豊かだったことは確かであり、地方の文芸活動を時代を辿りながら見渡すことが出来るという点でも手銭家所蔵資料の意義は大変おおいこと、このような資料を地域全体から広く発見、保存し研究していくことの重要性が述べられた。

4. プロジェクトの成果と課題

展示、連続講座、シンポジウムという形で成果を発表できたことは、地域の歴史と文化について新たな視点や認識を示すという点でも、資料の意味と重要性を理解してもらうことで地域に残る資料を一つでもおおく拾い上げてゆくという点でも、おおきな意味があったと思う。

また、資料をデジタル化したことで、外部との共働企画や連携、興味を持って下さる方々への情報提供など、閲覧や情報の共有が容易になった。今後調査研究、活用がより進んでいくことが期待できる。ただ、今回は企画展関係資料を優先しており、デジタル化の必要な文芸資料はまだ膨大に残っている。

資料活用、資料公開の為に、文芸資料をはじめさまざまな資料のデジタル化を継続して進めていきたい。また、シンポジウムや来館者から、当時の経済活動や藩とのやりとりなどを示すような周辺資料調査の必要性を指摘されており、手つかずになっている歴史文書関係の整理・調査にもなるべく早く取りかかればならぬだろう。

成果として作成した報告書²⁾は展示図録の代わりになるよう、企画展で展

示した資料画像とキャプションをはじめなるべくおおくの資料の画像を載せた。今年度に入り、複数の研究者の方から問い合わせや調査の申込などがあり、所蔵資料の調査研究に関しては、一歩ずつではあるが広がりつつあると実感している。今後ますます期待できるのではないだろうか。

資料の活用、外部への発信については、地域の多様なグループとの共働を回っていくことが不可欠であるが、島根大学附属図書館などでの巡回展示や、他地域の展示機関での展示公開も出来ればと考えている。

全体の反省点としては、参加者の人数が伸びなかったことが一番であった。いずれの企画でも内容についての評価は概ね好意的であり、次の機会にも参加したいという意見もおおくいただいたが、広報が足りないという指摘を毎回受けた。継続することで、地道に参加者を増やしていくことも一つの方策ではないかと考えるが、各企画を継続させるためには参加者の確保は不可欠であり、宣伝・広報についての工夫が必要だと痛感している。

調査・研究を継続することでよりおおくの情報を汲み取ってゆくとともに、それらを具体的にどのように活用するかが今後の目標である。アンケートなどから浮かんできた声も参考に、周辺地域への現実的な情報提供や連携も、模索していきたい。

注

- 1) 江戸時代、出雲大社へは、藩主はもとより、藩主不在の折には定期的に家老らが代参していた。また、諸用の藩士、石見銀山長官、巡見使、祈禱依頼の使者など幕府関係者、藩主の家族や側室、奥女中などお城に住む人々や上級武士の家族の参拝を口実にした小旅行など、さまざまな来訪者があった。このような人々の宿・休憩所が御用宿で、大社ではだいたい四軒の家が、回り持ち、或いは分担してその役割を担っていた。
- 2) 出雲文化活用プロジェクト編. 手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業：平成26年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書. 手銭記念館, 2015, 75p.